

間からチラ／＼とまた／＼星が見えた。あの星が頂上からみると大きく見えて美しいと聞いてゐる。上ばかり見てゐたので石にけつまづいた。先に木をみくびつた自分の心は、立ち所に自分の不束をあざけつた。

餘程上つた時分に道標が見えた。森永ミルクの廣告と道のりとが書いてある。仲々よい廣告だ。これなら登つた者は皆眺るだらう。一合目だ。此所で一合目かと思つた僕は、ふと下の景色を眺めやつた。點々と散在する電燈は空の星と相和して明るく輝いてゐる。一際目立つて明るい所もあるが、それがどこだか分らなかつた。前方を見ると大變平かな傾斜がある。楠君が「スキー場だよ。」と教へて呉れた。割合スキーの傾斜と云ふのはなるいものだと思つた。楠君が「今度の冬に連れて来てやらうか。」と云つた。僕は笑つた。

其所を後にしてすん／＼と進んで行つた。始めて「わらじ」と云ふのをはいたのだが、大變軽くて足の上下に便利だ。道の平和な時には星をみた。楠君「下にも星がある。」と云つて皆を笑はす。時々星が飛ぶ。スツと音は立てないが、尾をひいて消えてしまふ。やがて、二合目の標柱も通り越した。三合目の標柱も……。さすがにこれだけ上つたせいにか、風

あらう。

かすかに照らされてゐる道を進んで行く。矢張り彼の團體のどら聲は、依然として響き渡つてゐる。軍歌もある。流行歌もある。それらの騒音が一固りとなつて、一種の奇妙な音楽の様でもある。中中賑やかだ。

七合目の標柱を見た頃は大分つかれた。息使も忙しい。其所等一体はひんやりとしてゐるのに脊中は汗だく／＼だ。氣持がわるい。しかし汗も直ぐ引いてしまふ。汗は蒸發する時に身体を熱を持ち去ると物理に教はつたが、今、確實に知る事が出来た。何事でも聞いてゐる許りでは餘り分らないものだ。自分自身がやつてみてこそ本當に分るものである。

茶店の前へ來た。澤山のお客だ。楠君黙つてパイと入つた。後の三人も黙つて續いて入つた。茶店の百姓くさいおつさんが、嬉しさを顔をして茶をすすめた。何が嬉しいのかと思つて値段表を見ると「茶代御一人前十五錢也。」としてある。僕は驚いた。四人分六十錢である。儲けるものだ。彼の嬉しがるのも無理からぬ事である。薄い番茶で身体を休めて、しぶ／＼十五錢を拂つて其所を出た。一寸寒氣がこたへた。がしばらくだつた。

否、空氣がひんやりとしてゐる。草原の中で虫がなくな。どうしてもこれだけで自分には秋の様な感じがした。時々足に痛く感ずるものがある。電燈で照らしてみると「あざみ」だ。おや今頃あざみが咲いてゐるのか。道理で涼しいはずだ。然

し秋ではない。春先の氣候だ。後の方から團體らしいのが大聲を上げて歌を歌ひながら上つて來る。とても騒々しい。楠君が「今はあんなに元氣がよいが、もう直ぐくたばつて仕舞ふ。」と豫言者らしく云つた。自分もさうかなあと思つた。四合目がすんだ。「五合目からは一寸えらくなるよ。」と云ふ。

實際さうらしい。四合目邊りの道とは趣が違つてゐる。急である。それに加へて石塊がふえ出した。時には一尺許の岩石が所狭しと云はん許に突出してゐる。道の中もせまい。徒歩も困難になり始めた。しかも一個しかない懐中電燈も薄ぼんやりとなつて來る。「泣き面に蜂。」とはよく云つてある。此れには我我も弱つた。月の光を頼にしようとしても月は既に西山にかくれてゐるのである。それに引かへて明るくもない星は無数にある。晴れ渡つた夜の空の飾物だ。餘り實用に適しない。しかし中には北極星とか云つて、大變重要な實用的の星もあることはある。外の星は鳥合の衆とでも云ふべきで

身体を休めて置いたので樂だ。弟は元氣らしく先頭になつて歩いて行く。むしろ突進して行く方だ。餘程來た時分に以前の團體が腰を下して休んでゐる。すると楠君が自慢らしく「どうだ矢張りくたばつてゐるだらう。」と云ふ。標柱を照らしてみると、まさしく九合目だ。皆は「やれ／＼。」と云つた。そして勇んで進んで行つた。道が悪い。石ころでごろ／＼としてゐる。と、頂上の方から蓄音機の音が聞え出した。神々しさを感ずる頂上に、此の様な響がすることが、何だか山が俗化して行く様に思はれて厭な氣持がした。蓄音機の様な物はこう云ふ所に持つて來るべきでない。其の厭な心する物の近くへと進んだ。茶屋の者がしきりと客を呼んでゐる。「どうぞお入り下さい。」とでも云つてゐるんだらう。行けば行く程蓄音機の音が、其所此所からと響き渡つて來る。頂上に來たんだと思ふと、何だか嬉しい氣持がする。愉快だ。澤山の登山客である。そして彼等の中には草の上に寝ころんでゐる者もある。腰を下してゐる者もある。随分と夜露も降りてゐる事であらうが。

人の中をくぐりぬけて歩いてゐるとふと眼前に立つてゐる物がある。よく／＼見ると「日本武尊」であつた。石像の様

に思はれた。楠君が、殊勝らしく「此所が最高部だ。」と教へて呉れた。大森君は「さうですか。」と云つたが、僕は黙つてゐた。此所が一番高い所なのなら、日本武尊はまだ一／＼の間半程高い分だ。

大森君が餘りすすめるので、一番大きい茶店へ入つた。僕は最後に入つて先づ第一に値段表を視た。驚いたの驚かんのではない。一人前二十五銭なんだから。楠君に告げると、彼も「ほほう。」と驚いてゐる。しかし入つた以上出る分には行かぬ。程良い所に座席をしめた。此所でも矢張り蓄音器をならしてゐる。一緒に歌つてゐる者もある。成程其の歌を聴いてゐると氣持がよいが、高山に居ると云ふ感じが、一寸も起らない。これでは高山の静けさが保たれない。熱い番茶を持つて來た。十杯程飲んで日の出まで一眠りした。

眼が覺めると、東の方は明るくなつてゐる。時計を見ると四時半だ。急いで三人をゆりおこした。餘程眠つてゐると見えて中々起きて呉れない。大森君を起すには大分手間取つた。皆起してから冷くなつた茶を飲んだ。震へた。楠君が「そんなに震つてゐるならチャケツを着たらどうだ。」と言つて呉れたので早速着た。それから大分空腹になつてゐたので、握

たらしい。

日の出も眼前に迫つた。楠君急いで寫眞機を手にして、カメラを向けたので、僕も直にきちんとした。パツと光りが出て幾筋にも分れて、小學校の一年生の朝日の様な風である。

其の繪の様な光線が、雲をえぐつて外へ出てゐる。急に方方から叫聲が起つた。「出た、出たッ！出たッ!!」「萬歳、萬歳!!」それツ日の出だ」まるで火事場騒の様である。太陽が少し出た時分に楠君は寫眞を撮られたらしい。少しも氣付かなかつた。朝日は全部出た。丸く出た。附近に群がる雲が丁度大王に敬禮をしてゐる群臣にも見えて面白い。いかめしい四方を壓した姿は如何にも尊いものである。しかし太陽も全体がくつきりと空に浮ぶよりは、半分程出た時が値打がある様に思はれる。山と空の間から我々を覗いた、其の時の有様は云ふに云はれぬ趣があつて面白い。サツとほとぼる黄金の光線があたりの雲を金色に染める。雲と衝突をしない光線は我々の顔にぶつつかる。そして美しく輝いた顔にして呉れる。目が出ると登山客は一齊に喜ぶ。矢張り人間は光明と云ふものを欲する。そして光りと云ふものに對しては尊敬の念を抱いてゐる。光は偉大だ。

飯を食つた。氣の早い連中は早くも茶屋を飛び出てゐる。だん／＼と眼を覺して來た客の聲が騒々しくなつて來る。

四時五十餘分に茶店を出た。草葉には露が珠をなしてくつついてゐる。其所をかき分けて楠君について歩いて行つた。

露の爲に足が冷えて仕方がない。足袋もぼと／＼である。誰かそばの人が「日の出は五時二十分ですといふな」と云つてゐる。日の出を寫眞に撮らうとしてゐる楠君はそれを聞いて「まだ大分あるな。」と喜んで忙し氣に動いてゐる。あちこちと場所を選擇してゐる。大分苦心をしてゐる。そして僕等兄弟をそのダンに寫眞が撮り度いのであるらしい。露の中を引きずり巡はす。「冷いぞ。」と云ふと、後に居た男が「エへへへ。」と笑つた。此の笑ひ方は餘り氣味のよいものではない。尤も笑ふ者は氣味がよからすが、笑はれた方では氣味が悪いのである。しかし小氣味よい事には其の男の鼻がなかつた事である。額から口までズンベラになつてゐるのである。これには僕も笑はざるを得なかつた。しかし楠君は相も變らず我等二人をあちらこちらと引張りまはしては、場所の選擇に餘念がない。これには我々も弱つた。大變足が冷い。わらぢはぼとぼとである。大分弱つた時分には、漸くにして場所が定まつ

太陽の上るに連れて登山客は追々と下山して行く。淋しい氣がする。しかし突立つて群山を見下す時程氣持のよい事は無い。痛快だ!!自然と氣分が大きくなる。けがれた人間の世界を逃がれて樂天の境地に入り來つた様な氣がする。まして足下に今を盛りと咲き亂れる美しい花を見た時は尙更其の感を強くせられる。下山するのが惜しい氣がしてもつと止まつて居たい。成程下山して八ヶ月程すれば櫻花咲き亂れる春もみられようが、決してこれ程樂しくは無いに違ひない。何としても此所を去り度くは無かつた。

感慨無量の心を抑へて下山したのは眞夏の日中であつた。そして再びなつかしい頂上を望み見やうとしたが見えなかつた。かくして我々は再び人間世界へ舞戻つたのである。

あゝ、偉大なる自然よ。崇嚴なる自然よ。僕は自然を禮讚する。



## 敦賀の旅

種村 捨三

青疊なす中仙道を北へ一行七人、白いロープを曳いて自轉車を飛ばせたのは、未だ未明の頃だった。コースを北陸道に取り敦賀を目ざして走つた走つた一目散に。曉雲たなびいて我等一行を迎へてくれる。山も野も空も喜びに満ちて我等を迎へてくれた。木之本を通過した時分太陽はもうかん／＼照りつけた。

山と山の間を無人の境を行く汽車の様にぬつて走つた。一旦目的地を選んで必ず到着しやうと決心した我等の意志は如何なる危険を冒しても遂行せずには置かない。柳瀬を過ぎると、急に路は自轉車の通らぬ程の小徑になつた。小石ががら／＼／＼轉つてゐるしスロープも大分急だ。音に聞える戸根越えで下は魔のトンネル——柳ヶ瀬トンネル——である。

其處で休憩して涼をいれた。愈々征服しやうと自轉車を引き上げ上げたが、折からの太陽ものすごくじり／＼／＼鍋を熬る

様な暑さ。一息に一二回も進む事出来ず休む。流汗淋漓熱湯

を浴びたやう。休んでは上り、上つては休む。其のつらさ苦しさを嘗て体験した事もない苦しさを。友達も同じだったらう。

峠に近づくと前は息切れがして力も出ない。元より太陽は酷く當つた。自分ながらよくもこんな所を撰んだものだと思はれ始めた。然し今更引き返す氣にもなれぬ。木影に涼んでは勇氣を養つた。その時努力忍耐等の修養の必要缺くべからざるを痛切に感じた。彼のアルプス越えのナポレオンピレネーの峻嶺を越えたハンニバルの心中を察する事が出来た。先發隊のダウンの知らせを聞いた時は、千百萬の味方が援ひに来てくれた様に嬉しかつた。快哉を叫ばずにはおられなかつた。目ざす峠を後にして、愈々まづい辨當に舌鼓を打ち涼風に吹かれ乍ら晝食を木影にとつた。

やうやく蘇生の思ひをして峠を下る。少し下ると平坦な道になつたから乗れば忽ち一瞬千里。走る走る空を飛んでゐる様だつた。敦賀迄の距離五里半餘も一時間餘で正午にたどりつく事が出来たのは愉快だつた。

白砂青松の松原公園に落着いて初めて海水浴をした。キラキラ光る真砂、青い波、靜かな灣、三方を取り巻く連山空は

瑠璃色に澄みきつてゐる。裏日本で覇を稱へるだけに大型の

船舶、漁船は澤山出入りしてゐる。其の様子は僕の想像した長崎の縮圖に似通つてゐると思つた。

西に太陽が傾き初めると涼風——松籟——が我等を見舞つてくれた。旅の我が家なる天幕を亭の側に設けて夕餉の支度に取りかゝる。飯米をかす者、薪の支度をする者も忙しいが嬉しい。最初の飯盒炊事であつたからである。薪は磯馴松の落葉や枯木で充分に充てられた。食物が出来ると夕餉をしたゝめた。飯盒の御飯はとても味がよい。松影に寝そべつて海の景色を眺めてゐると、漁に出た舟の歸るのが點々と見え出した。だん／＼四方の連山は薄墨色に暮れて夕燒けにぼやけた帆掛け舟が靜に歸る光景は正に一幅の畫。到頭燈臺の火が明るい位の暗さに夜の幕は閉された。夜町を散歩したが海に沿ふ河岸の橋々には多くの納涼客が居た。街では晝に變つて夥しい人出である。歸りに公園中にしよんぼりと建つてゐる西洋人のさゝやかな住宅があり、ピアノを引いてゐるのが見られた。街では日本着に着替へて散歩してゐる西洋人を見た。天幕の中で楽しい最初の夢を結ばうと身を砂の上に横たへたのは十時頃だつたらう。

### ——第二日——

Y君が時計を見たら三時半もう眠れない。東の空は早やほんのりと明るい。暫く狸寝入をして四時半頃さく／＼砂を踏んで汀に出ると、曉の空は紅を漂せて將に引き明けんとしてゐる。友達達は皆んな何時の間にか地引網を引き上げてゐるのを見てゐた。自分も其の仲間に入つて今か今かと待つてゐると間もなく、少さく區切つた網がじゆすつなぎになつて多くさん引上げられた。其の中には蛸入道を初めとしハモ、小鯛が引つかゝつて來た。小鯛は元氣のよいもので四五十四もゐたらう。蛸入道の吸盤を弄んで一同興に入る。あちらでもこちらでも今引上の最中らしい。朝食を終へて三四人と金ヶ崎神社に詣る。鷗ヶ崎より港を見下すと石炭を運ぶ人夫は織る様に往來し、未だ夢から覺めた許りの漁船は河岸に連り並んでゐる。修繕らしい船舶や昨日から停泊してゐた大型の客船も入り亂れてゐる。納涼場から頭を廻らせば山骨あらはになつて枝振りのよい青松が潮風に揺れてゐる——一見松島の様な——島があつた。此の海水の麗しさ昨年丹後由良の海岸を通つた時と同感だつた。

其の時だつた。Y君が松の木影で眠つてゐると一人の賤し

からぬ人が歸路は必ず安らかに歸らせようと云ふ夢を見たと話した。元より信ずる事は出来ぬ。戸根越しのつらさは死に物狂ひであつたから歸りを思ふと悲しい思ひがする。皆汽車で歸らうと云いだした。而し有難いことに水泳の爲に來られた敦賀聯隊の一下士に、尋ねられるまゝにキヤムプに頼末を話すと戸根越より他に、自動車を通る新道が木之本に通ずと語つてくれた。もう疑ふ所でない。神明に通ずとはこの事を言ふのであらう。喜びにあふれた顔が見え出した。勇氣百倍皆その道を引き返す事に決定した。それで三時敦賀に左様ならを告げて歸途に着いた。熱汗三斗出して國境の上り坂を喘ぎ／＼上り續けた。水で腹を養ひながら、前と同じ位の苦しさを嘗めて下り道についた。走る走る天馬空を行くと言ふ勢で。涼風吹き初める頃鹽津神社の境内に自轉車を止めた。此の邊の湖岸の汚い事波の荒い事、琵琶湖にもこんな處があるかと疑ふ位だつた。此處では充分に睡眠出來た。

### 第三日

八時頃同地出發、賤ヶ嶽隧道を後に木之本へ。北陸道より中仙道に、我が故郷へと急ぐ。

願ふに此の旅は無駄の時間と金錢つぶしではなかつた。若

い我等に藥であつた。人生行進の縮圖とも考へる事が出来るだらう。苦心慘僧の背後に快樂境地のあるのを見た。人生は餘程根氣よく倦まずたゆまずコツコツと斷へず行かねばならないと思はれた。然し一度この辛酸を嘗めたならば、もう一度ぶつつかつた時には所謂要を得た解を得るであらう。我等受験生にとつても一服の良藥だつたのだ。

## 富 嶽 へ

宮 川 浩 三

夏休みを利用して、屢々夢に見た富士に登つた。

三日黎明登山口の一たる須走に着いて、朝飯をすました後金剛杖を手にして、元氣で登山の途についた。一行四人足並揃へて進む。山靈の御馳走美しい草花が兩側を埋めてゐた。九時頃に至り馬返し茶屋に達した。行手は次第に険しく砂礫は足の甲を埋めようとする。更に進むこと二十餘町小室神社に詣で、太郎坊を過ぎて喬木帯より灌木帯に移り、灌木と灌木の間に百合、石南花が赤く白く咲いて香を競へる如く思

と記憶してゐる。

お鉢廻りをするのが危険なので金明水に行き水一合をかねて用意の魔法瓶に買つて下山し八合より砂走りに出で迂るが如く、流るが如く、登る時の苦心を忘れ砂を蹴立てて漸く灌木帯に入り、再び珍しい草木に目を樂しませた後喬木帯に入り歸途についた。

## 伊 吹 登 山

高 畑 捨 一

八月八日、朝から空は晴れ流れ雲一つなき日であつた。僕は今日伊吹登山だと思ふと氣ぜはしくてならなかつた。

午後七時、家を出發し友と二人で、自轉車を高番へと走らした。午後八時高番に到着し、M君の家に行きよもやまの話をする中に九時十時は最早や過ぎ、十一時の時計のチン／＼と言ふ音に僕は「もう行かうかね」と言つた。それより隣りの人々と五人で伊吹へと足を進めた。途中路は林の中に入つた。何も見えない、唯墓の石碑が白く光つて居るのを見るの

はれた。漸く四合以上に至れば地上に一木一草もなく、山骨全く露出して目に觸れるものは荒涼なる焦土ばかり、時々白雲行き交ひ次第に冷氣を覺える。六合にたどり着いてからは足が疲れて進めない。「六根清淨」と掛聲ばかりで歩は進まない。前途はますます／＼険しくて燐岩のかたまりばかりだ。一町毎に杖を止めつゝ、漸く八合に着いた。身は疲れて綿の如く頂上に向ふ勇氣も出ないで遂に宿した。休宿所は石を疊みて窟となし僅かに數十人入れるに過ぎない。食器寢具の不潔なること云ふまでもない。翌朝早く目を覺して天を仰ぐとしぶきが風と共に襲來して衣を濡す。やむなく太陽の出るのを待ち出發し、難所として知られたる胸突八町にさしかゝる。さすがに名あるだけに道も険しい。更に勇を鼓して進むこと數町九合に達し、たき火のそばで寒さをしのぎ、これから頂上まで三町と思へば急に元氣が旺盛となつて一時間餘りで遂に無事難關を突破し、久須志神社の鳥居の巨巖の上に立つことが出來た時の喜びは大變の喜びであつた。

神社に詣で記念スタンプを繪葉書と手帳に受け今まで持つて來た金剛杖にも頂上の焼印を請ふた後茶屋にもどり名物の醃酒黄粉餅をふるへながら食べ、晝食を終りし時は午前十時

みであつた。此のやうな森を三四町歩むと路は春照に着きしばらくして伊吹の三の宮神社に到り、服装を正していよゝ登ることに用意をした。

一合目までの暗きこと僕等は燈火を持たなかつたので、石につまずき種々難儀をして一合目の茶屋で一休した。此の時は餘りあせつて居るものか餘り疲れたやうには思はれなかつた。

二合、三合と登つて行つた。途中は何度も休んで九合目を越してからの皆疲れ十間餘り歩めば一休と何度も休んで頂上の家の燈火を見た時の喜びは、言語に盡くすことは出来なかつた。皆は喜びの餘り疲れもしらないで走つて行つた。日本武尊の石像の前で、皆は食事を終へそれから日の出を見ることにした。

其の間ビュー／＼と体を吹き飛ばすやうな風が、しきりに吹いた。黒雲はあちこち風に吹かれて居る。次第／＼に日の出の時に近寄つて来たが、黒雲の往来はたへない。「もう駄目だ」とM君は言はれた。だがもう少しと風に吹かれながら其の場に留つてゐた。どうやら黒雲も南に行つてしまつたやうだ。薄黒き雲が東の空に水平線を引ま初めた。其の中に太陽

の光で雲は赤くなりやう／＼太陽が半圓を畫いた時の登山者の喜びは大變なもので、中には「萬歳」といふ人もあつた。それより一面咲き亂れてゐる草花の中を歩き廻つた。蝶もヒラ／＼と草の間を飛び花をさがしてゐるやうに思はれた。

それからすん／＼と下山した。途中遠く西の方を眺めると比良比叡の連峯が見へ其の前方に滋賀の半ばを有する琵琶が見え其の中に竹生、多景の二島が水に浮び漁船や汽船がいそがしさうに黒雲を立てて走つて行くのを手に取るやうに見ることが出来た。三の宮神社の境内に着いた時は疲れは急に倍して座すれば立つことが出来ない程だつた。疲れた足を引ずりながら高番に出でそれから自轉車に乗つて我が家に歸り縁に寝てお母さんの呼び聲に驚いて起き上がった。



部 報



劍道部々報

(山本記)

柳色新たに花爛漫の春が来た。思へば去年山陰の荒武者島根商業をして名をなさせ、恨を吞んで京洛の巷を去つたのであつた。然も四人の選士を送り出した我部は新學期早々新陣容を整へて、會稽の恥を雪がんものと臥薪嘗膽、劍戟の響、氣合は堂をゆるがし、遠くくだまするのであつた。練習に練習を加へた我等が腕は鳴り、雪辱の日を待つたのである。我が赤鬼魂を發揮する日は遂に來た。忘

れもせぬ七月廿四日我等は柔道部諸兄の熱烈な激励の辭に送られて彦根頭驛を發したのである。雖伏一年再び京洛の地に勝たずんば去らずてふ悲壯な決心を以て足を踏み入れたのである。

七月廿五日大日本武徳會主催第三十回青年大演武會の幕はきつて落された。長くも總裁梨本宮殿下の令旨を賜ひ、青年劍士の意氣は益々向上した。我が川那部、廣瀬、中島、山本、川村の諸士は初陣の若武者である。左に當日の戦績をあげよう。

(本)兵庫洲本中校 ○(中)谷島清勝治勝

- (本)大阪堺中校 ○(山)河本清一
- (本)香川大川中校 ○(平)川島村徳三
- (本)大阪泉尾工校 ○(清)筒水井康剛
- (本)岐阜第二工校 ○(高)川那部芳一郎
- (本)宇和島中校 ×(廣)窪田武城
- (本)徳島脇町中校 ○(西)吉坂川義光
- (本)宮崎高鍋中校 ○(山)海老原健悌
- (本)大阪高津中校 ○(吉)山本村純茂

(本) 山口下關中 校 ○細野善正 渡邊勝之

廿六日、遂に決戦の日が来た。蟻伏一年此所に倒して雄を取るか、伏して蟻をとるか。我等は三丹の覇者舞鶴中學と見ゆる事となつた。

京都舞鶴中學 本校

大將 伊庭 益雄 ○細野 善正  
副將 小池 高 ○山本 梯藏  
中堅 荒賀 勉 ○筒井 康彦  
二將 西村永太郎 ○吉村 茂三  
先鋒 小原 秀育 ○西川 義定

我西川先づ勝を制して、我軍の士氣を鼓舞せんものゝ、敵を歴し、刀を合はすこと數合天は遂に我に利を與へず西川涙を呑んで退く續く吉村必勝を期して起つ。彼西村もさる者常に胴を入れんと覗ふ。吉村懸じて力戰數合勝敗未だ定まらず兩軍は思はず手に汗した。然れども彼遂に胴を打つ。中堅筒井茲に於て我勝つか、負けるか、不幸にして彼に勝を讓

れば萬事は休するのである。嗚呼筒井の心中察するに餘りありだ。力戰苦闘此所を先途を奮戦した。嗚呼止んぬる哉。我遂に敗る。續く山本籠手を取られて退く。大將細野重なる怨に關々として輝やく眼を以て敵將伊庭をハツタと睨む。審判の聲と共に兩士サツト左右に開く。サリリツミよつて又バツと退る。打々發止打發止「お籠手」「籠手あり」細野得意の籠手を以て敵將初段伊庭を倒す。嗚呼萬事休す。臥薪嘗膽、遂に功ならず返り打ちに合ふさは。遂に舞鶴をして凱歌を揚げしめたのである。

再び京洛の巷に怨を残して去らねばならなかつた。然れども此所に於て倒れるのは我亦鬼健兒のなすべき事であらうか、我々は暑中休暇中秋の大會に備ふる爲、連日猛練習を始めたのであつた。

### 第十四回縣下武道大會の記

今年の武徳大會の恥を雪ぐ爲、明年の七

大將 筒井 ○清水  
細野 ○堤

虎姫中學

先鋒 磯野 ○川那邊

横田 ○川村

小林 ○中島

岡田 ○筒井

大將 村井 ○細野

十一月月上旬天覽武道大會記念第一回武徳會支部主催武道大會に中學團選手に我が部より筒井、川那部二選士を派遣した。然し惜しくも教員團の爲に第一回戦に於て敗れた。

### 彦根高商主催近府縣中等學校劍道大會(新チーム第二回出陣)の記

愛知商業 本校  
先鋒 ○野々村 | 廣瀬  
○同 | 山本  
○同 | 中島

月に備へんが爲九月より新チームを編成して試合馴れの爲、先づ縣下大會に駒を進めたのである。新チーム編成以來一ヶ月、九月廿九日滋賀師範に於て開かれる試合に出陣した。

伊香農學 本校

先鋒 加藤 ○川那部  
朝見 ○川村  
澤山 ○中島  
平川 ○筒井  
大將 寛 ○細野  
彦根商業 本校  
先鋒 西村 ○川那部  
脇田 ○川村  
多河 ○中島  
夏原 ○筒井  
大將 渡邊 ○細野  
本校 長濱農學

先鋒 川那部 ○島田  
川村 ○福永  
中島 ○吉川

野々村 | 川那部 ○  
○日比野 | 同  
同 | 筒井 ○  
佐藤 | 同 ○  
副將 ○森 | 同  
大將 大脇 | 同  
川那部、野々村を倒し、優勢に見えしが、日比野の爲に敗れ、大將筒井起つ。筒井、日比野、佐藤を敗り副將も倒さんず勢なりしが大勢如何ともなす能はず、勝を敵副將森に讓る。

### 十一月十五日彦根工業學校道場開き武道大會參加の記

我が筒井選士は高點試合に於て縣下より集まる數多の選士中にて八人を抜いて第一等賞を得た。最後に記者は我が所感を述べて筆をおかう抑々我が武道は禮儀を主んじ、精神を尊ぶも

のにして技はその第二とする所である。されば我敗れたりと雖も、夫の武徳殿の光景を思ひ起す時、余は愉快を感じずにはなられぬのである。即ち畫尙薄暗い堂堂たる一大殿堂に於て、血氣溢るゝ紅顔の美少年が敵を威壓して止まぬ瀾々たる眼光と底力ある氣合を發して戦ふ状を見ては、誰か青年の意氣を感じない者があらう。彼等は禮儀あり、從順にして然も勇氣に満ちてゐるのである。之でこそ我が武士道即ち日本魂の一大展開である。諸君、彦中六百の健兒諸君。諸君が學ぶ學園は神聖である。此の清き學舎を更に嚴かにしてゐるのは何であるか。之を舊藩主井伊伯の居城である。夫の徳川の四天王の一井伊の赤鬼と謳はれた井伊家の古城である。其の赤鬼を以て誇りとして居る彦中健兒諸君、我が武道部の繁榮を來す者は外ならぬ彦中健兒である。我等五年生は今三ヶ月にして母校を去らうとして居る。四年生以下の諸君、大に我が武道部の不振を打破して呉れ。殊に一年生諸

君に望む。何事も上達は一朝一夕にして成るものではない。多年の経験と研究とによつて上達するのだ。諸君の中には前途大に期すべき人々がある。遠慮はいらぬ「俺がやつてやる」此の意気のある人、武道愛好の士、大に我が道場を集つて鍛練せられんことを望む。

### 柔道部々報

曾我主將を初め四名の猛者をおくり出せし我が部は一抹の哀愁を覺えたれど、来るべき戦ひに榮光をえんものと直に編成を整へ、必勝の意気にもえつゝ、雨の日も風の日も汗と涙で猛練習をつづけた。

六月十日本年第一回の對校試合を舉行せり我が軍の勢當るべからず、我等悠々と勝つ。痛快なる哉我等の門出いと好調なり。

先鋒 ○野口 — 西村  
本校 彦商

大將 横田 × 伊藤  
六月十二日 津田 — 河合  
○藤村 — 須田  
住田 × 若林  
黒田 × 角倉  
同 × 藤本  
○村川 — 藤本  
木下 × 同  
同 — 北野  
○同 — 淺野

大將 横田 — 河合  
津田 × 久保田  
竹林 × 同  
住田 × 須田  
黒田 × 若林  
同 × 角倉  
○村川 — 藤本  
木下 × 同  
同 — 北野  
○同 — 淺野

大將 横田 — 河合  
津田 × 久保田  
竹林 × 同  
住田 × 須田  
黒田 × 若林  
同 × 角倉  
○村川 — 藤本  
木下 × 同  
同 — 北野  
○同 — 淺野

先鋒 野口(中) × 岩塚  
野口(工) — 谷  
○野口(工) — 谷

副將 久保田(商) × 伊藤(工)  
大將 横田(中) × 同  
同 河合(商) × 同  
同 津田(中) × 同  
同 同 同  
○藤村(中) × 同  
同 若林(工) × 同  
同 佐野(商) × 同  
同 伊藤(工) × 同  
副將 久保田(商) × 伊藤(工)  
大將 横田(中) × 同

### 六月十四日

商業を敗りし餘勢をかりて工業の堅城を陥れんと、大舉して遠征し見事に之を一蹴す。當日の成績左の如し。

先鋒 近藤(辰) — 小西  
○野口 — 同  
○同 — 北村  
○同 — 吉川  
同 — 谷澤  
近藤(國) — 松田  
村川 — 同  
○住田 — 同  
同 — 野口  
木下 × 堀野  
黒田 × 陌間  
竹林 × 上田  
藤村 × 若林

### 大日本青年演武大會出場の記

我等の待ちに待ちし晴れの舞臺は来た。過ぐる年々玉と砕けし先輩の悲憤を思へば我等の腕はうなり心は復讐に高鳴る。我等に手向ふは何者ぞ来らば来れ駒の蹄で蹴散らさん。一同は意氣揚々と京洛の地に軍を進めたり。

大將 津田 — 河合  
東5(本)和 — 中校 × 谷村  
西57(本)尼崎 — 中校 ○ 小近藤  
東190(本)傳習館 — 校 × 浦黒川  
東198(本)舞鶴柔道會 — 校 ○ 山野口  
西196(本)磯城農校 — 校 ○ 高住井  
東330(本)尾道中校 — 校 × 藤森  
西366(本)長府中校 — 校 ○ 佐横木

兵庫農學  
先鋒 津田元次郎 × 松尾正義  
住田剛 × 稻澤義雄  
竹林紀夫 × 松本一郎  
藤村正三 ○ 石見敏夫  
大將 横田廉一 ○ 松田彰夫

○藤村正三 石見敏夫  
我等は勝てり、日頃の望みも達せられたり  
二回戦出場とは柔道部の武徳殿に於ける最初  
なり。あゝ愉快なる哉  
二回戦  
惨敗！惨敗！血涙にむせびつゝ悲痛の言

葉を繰返すのみ、我等善戦せしも敵は二段を御大させる豪の者揃ひの高松中なり。嗚呼敗軍の將何をかいばん。來るべき試合にて復讐をなさん。因に高松中は此の全國大會にて優勝せり。

縣下中等學校武道大會出場の記

武徳殿の敗退より我等の復讐は此の大會に注がれたり。灼熱せる太陽の下に於ける夏季練習、天高く馬肥ゆる秋の猛練習、皆此の霸權を夢見てなり。戦はん哉時機到る赤鬼魂發揮するは此の時と滋師道場に馳せ参す。

一次戦

本校 八商  
 先鋒 津田 × 森野  
 大 照川 × 野崎  
 竹 林 ○ 野瀬  
 藤 村 × 井上  
 大將 横田 ○ 川村 初段  
 二次戦

本校 水口中  
 津田 × 岡  
 大 照 × 森  
 竹 林 × 青木  
 横田 × 門阪  
 三次戦  
 本校 膳中  
 先鋒 津田 × 岡田  
 大 照 × 山元  
 竹 林 × 西村  
 藤 村 × 今井  
 大將 横田 × 中野

行幸記念武道大會の記

式後恒例の武道大會を開催す。本年より三年以上は紅白試合を廢し對級試合を行ふ。選手はいづれも元氣で戦ひ接戦に續く接戦最後の榮冠は五年の一組へ  
 一回戦

先鋒 五ノ三 三ノ二  
 西川 | 岡野  
 安部 | 林  
 山口 | 藤本  
 岡村 | 堤  
 長野 × 古川  
 夏原 | 山内  
 北川 × 三輪  
 三將 百々 | 浦部  
 副將 飯村 | 赤田  
 大將 平川 | 北村  
 意外にも三年堂々勝を占め觀る者を驚かす  
 二次戦  
 五ノ一 四ノ三  
 先鋒 前川 | 廣田  
 堀 | 橋詰  
 夏川 | 田中  
 那須 | 吉田  
 山本 | 北川  
 松宮 | 北村

凱歌二組に上る。  
 準決勝戦

組 田 | 大照  
 吉原 | 喜久川  
 末松 | 村田  
 大將 津田 | 黒田  
 五ノ二 四ノ二  
 ○夏川(孝) | 山口  
 福永 × 西堀  
 角田 × 中村  
 兒玉 | 平塚  
 茶木 × 古川  
 上林 × 木下  
 西川 | 藤田  
 廣瀬 | 藤村  
 横田 | 川瀬  
 宮崎 | 竹林  
 四ノ一 三ノ三  
 先鋒 森野 | 川脇  
 伊藤 | 中島  
 岡村 | 柴田

大接戦を演じたりしが赤田の攻撃功を奏し  
 西田 | 北森  
 中川 | 三輪  
 山本 | 飯島  
 北村 | 塚原  
 植田 × 阪野  
 大將 松岡 | 西村  
 三ノ一 三ノ二  
 北村 | 岡野  
 近藤(國) × 藤本  
 小財 × 藤本  
 近藤(謙) × 堤  
 青山 × 古川  
 加藤 | 山内  
 高畑 | 三輪  
 村川 × 浦部  
 戸下 | 赤田  
 上池 × 北村

優勝候補同志にて終始接戦なりしも、一組終に名を成す。

四ノ一 三ノ二  
 先鋒 森野 | 岡野  
 伊藤 | 林  
 岡村 × 藤本  
 西田 × 堤



代表 ○森野 浦部  
 園体試合中にて最も観客を緊張せしめし好  
 試合なりき。

決勝戦

先鋒 ○前川 森野  
 堀 伊藤 ○  
 ○夏川 岡村  
 ○那須 西田  
 ○山本 中川  
 ○松宮 山本  
 組田 澤田  
 吉原 北村  
 ○末松 植田

大將 ○津田 松岡  
 一は五年代表、一は四年代表共に二勝者同  
 志興味を持たれたが勝負は簡単に終り五年一  
 組優勝す。  
 二年以下は例年通り紅白試合を行ふ。  
 紅 白  
 ○岡村貞之助 北村 清嗣  
 同 吉田 床一 ○  
 伊吹 正雄 同 ○  
 小野 豊久 同 ○  
 吉田 銀藏 同 ○  
 池田 春美 × 谷口 信一  
 歸山 仁利 × 末松 武男  
 ○松宮 敏雄 吉田 龍性  
 同 × 平井 敬三  
 ○三木真太郎 山中 龍三  
 同 秋山 米造 ○  
 筒井 賢三 同 ○  
 夏川 鐵之助 同 ○  
 高居 寛一 同 ○

野村 正一 × 同  
 ○古澤 茂 西村 覺太郎  
 同 原 重信 ○  
 小川 福太郎 同 ○  
 深田 太郎 × 同  
 寺村 新藏 大照 豊 ○  
 佐野 年久 × 同  
 竹野 正司 吉田 博  
 堀江 茂男 竹村 榮 ○  
 西田 一郎 同 ○  
 北村南洋次郎 同 ○  
 ○建部 俊夫 那須 流源  
 同 箕田 肇 ○  
 辻 威雄 × 同  
 辻川 龍太郎 森 健三 ○  
 山田 憲一 同 ○  
 ○田澤 清一 同 ○  
 同 西垣 正勝  
 同 田中 一雄 ○  
 大森 徳三 同 ○

○赤田 龍三 同  
 同 木村 紹  
 同 × 大谷 宗忠  
 金子 裕 朽木 徳房 ○  
 ○丸岡 芳之 同  
 同 岡野 貞雄 ○  
 松岡禮次郎 × 同  
 百々 尙二 × 栗野 新六  
 田中 禮二 上田 隆治 ○  
 鳥脇 四郎 同 ○  
 ○藤本 利典 同  
 同 尾原 宗乗  
 同 大橋 義造 ○  
 島田 實 同 ○  
 杉本 甚平 同 ○  
 山口 一郎 同 ○  
 坂本 達雄 同 ○  
 ○北村 辰夫 同 ○  
 ○同 三上善右門  
 ○同 深井

○同 北村 肇  
 同 × 堀部 久光  
 ○速水常太郎 大溪 淳融  
 ○同 辰巳 善三  
 ○同 堤 彰雄  
 ○同 一圓 龍雄  
 同 野村 信夫  
 同 × 三輪久左衛門  
 上林 茂 × 岡野 義雄  
 ○宮川 脩治 桂 敏三  
 ○同 北川 善明  
 ○同 北川 善明  
 ○近藤 辰藏 小林 茂八  
 同 清水 修  
 同 多林 慶三  
 同 × 島津 富男  
 同 上田 敏雄  
 ○藤實 正憲 山村 一郎  
 同 朝井 秀國 ○  
 ○廣瀬 高一 同  
 同 黒中 力精 ○

太田能生一 × 同  
 島本 真三 × 杉本 典夫  
 大橋 弘道 × 渡邊 弘  
 久木彌惣八 × 柴田 正己  
 錦織 恭三 柴田 禮二 ○  
 森 彌一郎 同 ○  
 久禮 稔 同 ○  
 ○塚田 英雄 同  
 同 國島 嘉瑞  
 同 北村 吟雄 ○  
 同 西村平次郎 × 同  
 ○橋本 末藏 河合 芳章  
 同 福阪卯之助  
 同 林 茂二郎 ○  
 同 大西 三郎 同 ○  
 同 松井 敬三 同 ○  
 同 田中宗勇紀 同 ○  
 ○白井 好一 谷下 亮英  
 同 福田 見嶺 ○  
 ○竹内 禪真 同

竹内 禪真 × 若林繁二郎

國領友之助 × 志賀谷重藏

○布施 一男 | 辻村彌太郎

同 × 吉川 實乘

副將 大橋規矩雄 | 北村 利一○副將

大將○山口 隆爾 | 同

○同 | 夏川文二郎 大將

最初白軍斷然優勢なりしも、紅軍漸次ばん回し一進一退の試合となる。紅軍大將山口出場するに及び形勢逆轉し終に白軍根を呑む。當日の受賞者左の如し。

銅メダル一個

五點 大橋 義造

四點半 速水 常太郎

四點半 北村 辰夫

四點半 秋山 米造

賞狀二枚

三點半 林 茂二郎

三點半 近藤 辰藏

三點半 吉田 床一

賞狀一枚

三點 柴田 禮二

山口 隆爾

對外試合

(本校)吉田 龍性 (本校)松宮 敏雄

(西小)牧野 貞直 (西小)若林 二郎

(本校)末松 武男 (本校)近藤 辰藏

(西小)出口 幾雄 (東小)仙波 義雄

(本校)柴田 正己 (本校)岡野 貞雄

(東小)杉本平二郎 (東小)倉垣 利夫

(本校)岡村貞之助 (本校)大橋 義造

(東小)辻 武雄 (東小)竹内 久彌

(商本)村川 文男 (商本)平川 忠夫

(商本)小堀米太郎 (商本)佐野 外久

(商本)大照 健三 (商本)黒田 秀隆

(商本)須田 義雄 (商本)河合 明雄

(工本)西村 義雄 (工本)近藤 國藏

(工本)西村 一雄 (工本)陌間源三郎

(工本)上田 義雄 (工本)村川 文男

(工本)若林菊二郎 (工本)伊藤 信三

我部は七月以來數名の部員を失ひて、目指す覇權をも握る事出來ず、黄金時代建設も夢

元氣に満ちみちたる若人の叫び、終日水上にひびけり。

かくて番組も進み、最早や學級レース、ミックスレースも終りを告げたり。

我等の漕法を示すべき選手獨漕の時は來れり。拍手に送られて艇上の人となり、彦中健兒六百の聲援に依りてスタートを切れり。我等に我等が特有の漕法を昔の者に知らしめんが爲タイムは問題外とし始終ロングにてゴールに入れり。我等の樂しみの的なる職員レースは始まり。學生時代の元氣に若返へられし先生の頑張り漕がるる面白さ!! 他校選手の出場は八幡商業一校なりき。

又もや起る若人のごよめき、そは彦根高等商業學校と彦根高等女學校の職員團の來賓レースなり。 彼方此方に起るスプラッシュ、時々亂れるガール、勝ちを得んとあせる兩艇の舵手の叫聲、かくして來賓競漕も終了、夕もや立ちこむる頃高くそびえたる金龜城の麓、港灣の地に於

### 本校創立記念日校友會端艇部大會

本年こそは例年よりも盛に大會を開かんものと部員一同は一生懸命に計畫に餘念なし。五月一日は遂に來れり。大會は彦根港灣にて開かれたり。

我等のこの目出度き日を祝はむが爲か仰いで天空を眺むれば一片の雲さへなく、すべて碧俯して紺青の水を望めば水面穩かにして油の如し。

突然起る號砲、續く逞ましい若人の競漕の力強き、人々の心を引き緊めずんばおかつ。

になつた。此の後を引受けて呉れる諸兄の奮闘を希ふ。柔道を愛好せられる諸兄よ。若人の思ひ出多き時代を柔道部の爲に活躍して頂きたい。振はざる彦中の武道部に一はだぬいでもらいたい。さらば諸兄よ。

昭四、一一、二四 横田廉一記

### 端艇部々報

部員 一圓記

部長 宮原先生

理事 上木先生

委員 薄木先生

五年 居山猪一

一圓 宣雄

山口 通二郎

四年 森野 壽

西田 悞

て天皇陛下萬歳、彦根中學校萬歳を各三唱し此の意義ある端艇大會の幕は閉ぢられたり。 本年は例年の呼物の學年レースを種々な都合に依り中止するに到りたるは残念なる事なり。

因に當日の選手獨漕者は左の如し。

C 居山猪一

S 澤田傳七

5 澤田二郎

4 一圓 宣雄

3 森野 壽

2 北村安彌

B 西田 悞

昨年に鑑み今年こそは早くより選手を編成し威を斯界に振はむとして新學年早々部長、理事の諸先生と共に殘されたる我等は種々合議の上新に澤田傳七、澤田二郎、北村安彌の諸君を加へ早くも四月下旬クルーの編成を終へたり。 時正に本校創立記念日の前なる故色々な準

備の爲十分なる練習をなす能はず、五月二日  
が過ぐるや我々はベストを盡すをモットーと  
して同月上旬より猛練習を開始せり。

先年我等の先輩が決勝戦に於て山陰の雄米  
子中學に惜敗し涙を吞んで退きたるを忍び又  
且ては仇敵米中を一蹴して、全國の覇權を掌  
握し勇名を天下に馳せたる先輩の偉業を偲び  
再び當時の赫々たる彦中端艇部の名聲を挽回  
せんが爲、我等は日々努力に努力を積み研究  
に研究を爲し、朝には授業開始前三十分をバ  
ツク上に正確なる漕法に費し、放課後は勿論  
練習に我等がベストを盡せり。日々に我等ク  
ルーの漕法も整ひ、タイムも増進せり。あゝ  
我がクルーの目覺き發達よ。

### 京都帝國大學競漕大會出 場之記

五月十一日そは大洋に於ける御親臨豫行演  
習の前日なり。我等クルーは上木先生の指導  
の下に瀬田川の會場へ。

我等が仇敵、名古屋商業は早艇上にありて  
自信ありげに我等を待てり。我等も又必勝の  
自信をもちて上艇す。

準備完了!! 嵐の前の静けさ! 一瞬! ド  
ン!! 俄然大盃は切られぬ。彼の艇進み、我が  
艇進む。彼は三シート先じたり。我等はミド  
ルにて勝たむとする戦法なり我が舵手「ミド  
ルヘビー」を宣す。見よ、グアウに躍起する  
水の如何に盛なるかを、我等はベストを盡せ  
り。ラストヘビー!! 我等は夢中に漕げり「オ  
ールスカー」の聲聞く迄總て無意識なりき。  
我々はリードする事三艇身を以つて快勝せり  
我々クルーの顔面に溢れたる喜び、それは衷  
心よりの喜びなりき。

第一回戦  
彦根中學校 白 一着  
タイム 三分三十九秒  
名古屋商業 赤 二着

本年度最初の手ならしの爲に出發せり。  
當日天氣晴朗にして水面波立たず絶好の漕  
艇日和なり、我等の今や遅しとまちかまへし  
時は來れり。時に午後二時。  
コースは八百米の逆流なり。相手は湖國に  
覇を唱ふる滋賀師範奉公園なり、我は審判艇  
より放たれたる號砲に依りてスタートを切れ  
り。スタートに於て我が艇先んじたり。總員  
は八百の逆流をものともせず、ベストを盡せ  
り。ミドル過ぐるころ彼先んぜむとす我々奮  
ひて彼に迫り暫し肉薄戦を保てり。ラストヘ  
ビーあと三十本」兩艇の舵手の叫聲、スピー  
ドが増す艇は進む。拳銃一發。あゝ彼は我に  
先んじてゴールに入れり。我彼に遅るゝここ  
わずかに二シート残念萬事休す。  
一同は天を仰いで心に叫びぬ。「來り見よ、  
八月の我等が大會に於ける活躍ぶりを」我  
等は悲憤裡に會場を後にせり。  
因に當日の出漕選手は左の如し。  
C 居山猪一

重れたり。戦はむかな時期到る總てを天にま  
かしてシートにつけり。  
出發の合圖一發ブレードは水面を打つ、あ  
ゝ戦は初まれり、敵二シートを先じたり、彼  
我をして接近するを得しめず、兩艇の間益々  
離るるのみ、力漕又力漕、トップに打當る水  
の音風に似たり。後に残れる幾百の泡の渦卷  
これ何を物語るや。  
我は彼に迫らんとすすでに功なし「ゴー  
ルイン」の宣告は下れり。  
嗚呼無情なるかな、天や再び我等をして湖  
國の敗者となせり。我等の努力も終に水泡に  
歸しぬ、はかなくも奉公園に敗れたり、我等  
は心中にて男泣きに泣けり。  
青天を仰げば日輪は我等の勞を謝し、一層  
の奮闘を望むが如く我等の頭上に輝けり。  
此處に於て初めて努力の少なかりしを覺れ  
り、來る八月の大會こそ我等の目的を達せむ  
日なり、未だ練習を積むべき日あり。許せ我  
等六百の健兒よ!! 來る大會には諸君の期待

第二回戦の成績は  
彦根中學校 白 二着  
タイム 三分十四秒  
師範奉公園 赤 一着  
タイム 三分十秒

かくして他日高商の水上大會に於て、會稽  
の恥を雪がが爲に、我等はモットーとする  
ベストを盡し朝な夕なあらん限りの力を用ひ  
日々練習し、一日千秋の思にて時の到るを待  
てり。  
彦根高等商業學校水上大  
會出場の記  
五月十九日!! おゝ、我等の進歩を示さんぞ  
待ちし高商の大會は彼の瀬田川に一敗地にま  
みれしより一週間の後に彦根港灣に於て行は  
れたり。  
今日こそは月桂冠を得んものと、校友諸君  
の熱烈なる應援に送られて會場へのぞめり。  
に背かざる決心なり。  
八月の大會を期待あれ!!  
因にクルーは  
舵手 居山猪一  
整調 澤田傳七  
五番 吉原正造  
四番 一圓宣雄  
三番 牧村捨一  
二番 森野壽  
艇軸 西田悞

結局此の大會に於て奉公園タイム三分五秒  
のレコードにて八商を破り再び覇を握れり。  
夏季練習之記  
高商の大會に破れてより本年度最後の石場

の大会に恥を雪がんともの艇速の速やまらん事を願ひつつ猛練習をなせり併しかなしいかな一部の選手變更の爲再び打撃を受けたり我等は直に相談の上五年山口通次郎君を推して我が部に入る事を頼めり君直に一選手として立つ事を承認す。

我等の目指す大会はあと約三月の後にあり一同臥薪嘗膽の思にて日々練習にベストを盡せり。

朝には五十本乃至百本をバック臺上にて行ひ、或はストラップ引きに依り、或る時は懸垂屈臂を數回行ひ耐久力の増進を計れり。

大湖に出てはロングを引き力漕に力漕を重ね進歩いちじるしきものあり。

我等を困らしむる學期試験も終を告げ此れを過ぎ我等の体力も續く限り専心努力すべき時期となれり。

七月二十日我等は先年通り片原の松盛館に合宿する事となれり。

日々確實に時間割通りに實行せり、一時は金

なり」我等に取りては一分、一秒の間も貴重なるものなればなり。

朝には五時に起き人の聲なく、波の音するより他に何の聲もなき、清き歴史の漂へる満々たる水と東天高く聳ゆる金龜城を見遙して必ず磯山向けてロング或は二本漕を實行せり併して朝食終れば登校に急ぎ、歸れば晝食をすまし暫時の晝休をなし直にバック臺上にて漕法を研究し、しかる後再び艇庫へと急ぐ

愛艇三上を湖上に浮べ、果しなき水面を東、西へミロングを引き、或は半時間のロングにて一舉多景島に到り、日曜には長濱へ遠漕する事も屢々ありき、波荒くとも外湖にて練習を積り、併れども危険なる時は港灣に於て練習し時には大洞、米原、方面へも出かけた

り、夕食を終れば再びバック臺上にて漕法を研究して、八時には總員は床に入りぬ。

雨と雖も少雨の日は湖へ出でて活躍せり、はげしき日は終日バック臺上にて体を鍛練せり。

七月も半過ぎ暑中休暇も來りて、校友は樂しき家庭に急げども、我等にはそれにまさる喜あり、朝早くより愛艇を浮べ湖上に雄飛し

以つて槍舞臺に立たんとす、我等赤銅の肌には赤鬼魂を宿し、涙と汗に濡れまみれ夏の一日は暮れむとする時愛艇を庫に収めて終日の勞を謝し、綿の如くつかれて合宿所へ引上ぐるなり。幸にも一人の病者もなく、協同一致、和合して總てはなめらかに進行せり。

今年に西江州方面への遠漕を止め、かつて我が端艇部の華たりし伊吹氏のコーチの許に必日に二回もしくは三回の千百米のコースを引けり、日々に我等のタイムは良好になりたり、我等一同は益々其結果を得んものと奮闘せり。

時は來れり八月三十一日夜、燦然たる大旗を湖東の地に持ちかへらんことを誓ひて合宿所を去り大津へ向ふ。

× × ×

報の來るを待つ。

我等は心中から我等の仇敵米中と組合ひ仇を雪がん事を切望してやまざりしもそれも叶はず遂に左記の如く競漕する事となれり。

五回(一回戦)

彦根中學 白

津中學 青

和歌山商業 赤

左記學校練習タイムより見るに我等と争ふ能はず、我等は一回戦には必勝の自信を持ちたり。

一同明日の早く來らん事を祈りつつ旅宿の床につけり。

八月四日の東天漸く白む頃起き出で齋戒沐浴前の縣社天孫神社に詣り、午前七時三十分前年度の優勝校米子中學、滋賀師範、より優勝旗返還式あり、こゝに第二十七回全國中等學校優勝競漕大會の幕は切つて落されぬ。

一回、二回、既に過ぎ我等の出場すべき時は到りぬ、クルーは自信をもちてシートにつ

京都帝國大學主催

全國中等學校優勝競漕大會出場之記

重なる不覺に如何にしても之を取戻さむものと勇氣百倍、我等は七月三十一日夜、我等の胸中に赤鬼魂を宿し、本年こそは自信をもちて遠征の途につく時感慨の涙は頬を傳ひ選手一同心に必勝を誓ひぬ。

七時頃無事に佃亭に着けり、直に京大端艇部事務所へ明日よりの練習を申し込めり。

明ければ一日大津に於ける最初の練習をなせり、陸にある各校の時計掛の急がしさ。

大津に宿りてよりは朝晝二回のコースを引きたべには四宮神社の境内に於てバック臺をなせり。

遂に大會は來れり。

八月三日夜、宮原先生、上木先生と澤田二郎、吉原正造の兩君は抽籤の爲公會堂へさおもむけり、残れるクルーは相手噂しながら吉

けり、早や我等はスタートにあり、號砲一發

三艇は水の面をけやぶりつゝゴールへ急げり、我々は力漕又力漕終始トップを切り樂々とゴールに入れり、我等の敵は第二回戦の新潟中學なり、種々作戦を先輩諸氏と打合せて次回のエネルギーをたくはへる爲に休養を取れり。

第三回(一回戦)

津中學 一コース 青 二着

和歌山商 二コース 白 三着

彦根中學 三コース 赤 一着五分二十七秒

第十二回(一回戦)

彦根中學

和歌山中學

新潟中學

北陸の地に名をとどろかす新潟中學と覇を争ふべき時に到れり當日天氣晴明なるも午後の湖上は波高し

今こそ我等の雌雄を決せんの時!!

七勇士怒々として乗艇。三艇見事なるサリ

ユートを終へ萬雷轟くが如き拍手を後にしてスタートに向へり。海に陸に旗幟翻り、彦中頑張れ！の叫びは、我等をして一層興奮の度を高からしむ。三艇スタートに付くと見るや號砲一發白沫飛び散りて三艇入り出す、湖面波荒く怪物群の襲来、海魔の鬼號の如し、併し不屈不撓の我等の意氣は益々堅し、いかなる大波も我に勝つ能ず、打連なる巨浪を、けやぶりつつ白煙立てて前進す、其の快や筆舌に絶す。

共に物凄きスタートへヒーを以つて力漕し、舷々相摩す、ミドルにて新潟中學稍我等に先んず、我急調を以てすれども彼亦急調を以てし遂に七百のボールは来りぬ、抜くべき時は今なりと思ふや否や「此處三本」と舵手さけば艇足頓に速まり新潟中學を雁行し再び猛烈なる白熱戦を演んじつつラストに入れり。

此處に於て「倒れて後已むの覺悟」をもつて最後の猛漕を續けしも如何せん、號砲一發を汚したるなり。

戦に臨みては常にベストを盡せり、しかれども功なし噫未だ努力の足らざるにや、深く俛首して先輩諸兄の御宥恕を乞ふ。

來年は我が端艇部の黄金時代、五年生選手二人が去るのみ、期待あれ。

高商の大會に出場せし折、試験前とは云へ彦中を代表せる我等を應援せられし人は何人？悲しいかな、わづかに數名に過ぎず、我等クルーの遺憾とするところ。

戦の勝負は勿論選手の努力次第さはいへ選手を鼓舞する應援の力も亦少しとせず、彦中六百の赤鬼健兒の心中よりの熱援、そは我々に如何ばかり奮發心を起さしむるものぞ、諸君試に思へ、そこには「勝たざれば再び歸らざる」の念の生ぜむことな。

總て團結の力を大事さて團結なくしては萬事成らず、本年の如何に團結力の少なきことか。

新中已にゴールに入りぬ。  
和歌山中學はスタートより我等兩艇より離れて問題外なり。

我新中に後れる事僅か三シート、萬事休す我等は二位なりき、新潟の牙城まさに潰れんとするや觀衆にはかに總立となりこれをして手に手に汗を握らしめたり、其壯觀いかにばかりぞや、我等は俛首して校友諸兄の御宥恕を乞ふのみ。

第十二回

- 彦根中學 一コース 青 二着 五分十三秒
- 和歌山中 二コース 白 三着
- 新潟中學 三コース 赤 一着 五分十一秒
- 因に當日の出漕者は
- C 吉原 正造 (四年)
- S 澤田 傳七 (四年)
- 5 居山 猪一 (五年)
- 4 森野 壽 (四年)
- 3 山口 通二郎 (五年)
- 2 北村 安彌 (三年)

B 西田 悱 (四年)  
監督 宮原 先生  
マネージャー 四年 澤田 二郎

當時來津して應援をたまひし諸先生、諸先輩及校友諸君に多謝す。

過去を顧みて

春風胎蕩櫻花爛漫として衆鳥和鳴し、鳥獸飛躍し、人心陽蕩たる四月、最早一回は彦中端艇部の爲否校の爲に光榮ある歴史の一頁を残さんものと「ベストを盡す」をモットーとして苦心に苦心を重ねたり。

五月十二日の瀬田川に於けるボート大會へ初陣としての出場より他の大會へ出場する、と約二回。

天なるかな命なるかな努力の酬はまことに薄し、我等の四月以來のクルーの努力空しく幾度か敗慘の士となれり、我等は校の歴史をか

諸君が如何に選手に對して理解なきかと思ふ時、我等は敗者たる上に新に涙を流さざるを得ず。

在校生諸君よ、我が部にかざらず選手なるものの心中をよく理解しよくこれを助け、選手は我等の代表者なりと思ひ、今後益々御後援あらん事を切望す。

同日應援下されし方々に深謝す。

本年中の我が端艇部の成績一覽  
五月十二日 負 奉公團 (於瀬田川) 京大

五月十九日 勝 名古屋商業 三分三十九秒  
「高商於港灣」

八月四日 負 奉公團 三分十四秒  
「津中學」

五分二十七秒 「京大全國大會於石場」  
和歌山商業

新潟中學 五分十三秒  
和歌山中 五分十三秒  
合計

大會出場數 三回  
競漕數 五回  
勝つた校數 四校  
負けた校數 三校

(注) タイムは我校の記録なり  
コースは  
瀬田川 八百逆流  
高商 八百順流  
石場 千百米

(先)

野球部々報

部長 佐藤 先生  
マネージャー 西川伊之助 國枝 保



するさひつをかへてサブが代りの飯をも  
らひにゆく位だから底が知れない。「おい砂糖  
も。野球部は甘いものの好きな奴許り。」これ  
で六杯目後茶漬で七杯」と一人言云つて居る  
間に「七杯」の尊稱をたまはるのだから面白  
い。

小怪物君は學校中はおるか他の學校まで知  
れ渡つた有名な名の持主だ。部では同じ名前  
が二人あるので便宜上「大」の方が去られる  
までは「小」の頭文字がついてゐたが今ちや  
「大」の方は居られないしその名をほしいま  
ゝにしてゐる。ファンでも知つて居ると見え  
て、この間の大會にも「怪物：怪物：」と連  
呼して居た事もあつた。飯食ふのも最後まで  
やつて居る事だらう。筆者は常に大将と席を  
同じにするが未だその一緒に箸をおいた事は  
ない。おそろく最後まで頑張る所なんか名に  
そむかない凄さだ。それで居て氣はやさしい  
のだから。そして大の讀書家で以て有名な  
彼と筆者と球界の交り四年、肝臓相照す友と

して今は東に西に別れようとしてゐる。今更  
名残惜しいわけだ。まあそれはさうとして一  
寸名前を公開しよう。

出目金先生は説明に及ばずキャプテン閣下  
電報員君は一年生以來の持ちあがりの名。そ  
れに筆者の瓦斯君と以上四人は共に今年去り  
ゆく兄貴だ。去るさ云ふと悲しくなるから止  
めよう。

昨年の合宿でひたひに大きなあせもを出來  
させて丁度それが三つ目に見えたのでつけれ  
れた厄介なものもある。

それから例のサイダー君、ユーモリストな  
のに徳利君が居る。仲々フアイアテングスピリ  
ット満々の男。

合宿の午前も楽しいが晩も又別段に愉快だ  
風呂はいつたじ、飯は食つたし、赤い血に燃  
ゆるもの光輝みてる我等」を歌つたりして  
若い選手等の春の宵はかく楽しくふけてゆく  
誰かこんな許をわいてゐる。彦中野球部  
は投手のガスタンクが放つ空砲により打者を

惱まし封じてゆくが捕手にはうまくつめるふ  
んづまりあり。よくガスタンクの女房役をつ  
さめてゐる。ひとたびランナー出れば、フ  
アストの怪物ちよつとつまみとりて食ふ。な  
ほ危き場合はセカンドの電報員かけめぐりて  
ナインの各々へ事急なるを告げる。ショート  
は三つ目もて勿球飛球自由自在、三つ目の名  
をばつかしめず、サイドには夏向のサイダー  
あり、戦閑なれば皆に清涼劑として便利であ  
る。レフトのM君元氣満々青年選手かくある  
べし、センターの出目公その名は朽ちず今に  
冠たり、よく主將としての重任を果す。宜な  
る哉！ その眠人よりは餘計に出て居る。ラ  
イトの徳利君上邊はすべりて危きもうまく口  
に流れ込めば確實である。補欠には七杯、屁  
揃つてひかへてゐる。なんて何處で書いてき  
たのか面白かつたので書きとめておく。

「皆集まれ、これから天狗俳會だ」先生が紙  
と鉛筆をもつて來て電燈の下で車座になる  
やう選手に指圖される。

天狗俳句とは諸君の中でも御存じの方もあ  
らうが紙を三段にきつて上の方に一人づつ俳  
句の上の句の五字だけ何でもかく。一巡して  
又今度は、真中に前に自分が書かないやうな  
所へ中の句を七字をかいで一巡して下の句を  
かいて後で開ける、それをつなぎ合はして一  
つの俳句とする。それをやるのだ。先生が開  
いて見られる。野球部だけに仲々面白いのも  
ある今、日記の端に傑作として記しておいた  
のを二三書かう。

れそべつて近所近邊凄いな  
食ひすぎて下手なオルガン頼いな  
すきやきだ泣き顔の後嬉し顔  
足が痛いしぼられたよとぐちこぼし  
叱られてよくも屁をこくいやな奴  
屁をひつて夜のしづけさを知らぬ顔  
しぼられてへたばるは誰Kやん哉  
れそべつての句は傑作中の傑作。二大怪物と  
云ふ凄いなある野球部の合宿の夜に適はし  
い句だ。食ひすぎての句も練習で腹へこ

になつた後うんさ飯食ひ合宿でれころぶ風  
情がよく分るであらう。すき焼きたの句もう  
んとしぼられて、つかれきつて泣顔した後「す  
き焼き」さきいて喜ぶ選手の様子を解する事  
が出来よう、後二句は一寸下品だが合宿生活  
の消息を充分に物語つてゐる。最後のケーヤ  
んとは怪物の略なる事は御承知の通り大きい  
大将もしぼられてよくへたばつたものだ。

この様に殺風景な合宿にも多趣味な人の寄  
合だから他愛もない。

一晚おきにコーチャーの宿へゆき野球のセ  
オリー。ルール質問等を研究にゆく事になつ  
てゐる。さうなると學校と同じであるが教室  
でよく舟漕ぐ連中も此處では一生懸命「プエ  
ルダーのバツクアツプ？」さか若い選手にコ  
ーチが質問する。一心だ。その様で野球學も  
仲々難しい。それでも歸りは町の中を合宿ま  
で荒くれ男が應援歌をうたつてかへつてゆく  
その後は合宿でランキ騒ぎだ。  
「もうれよか」上品な事云ふ奴は少ない。け

つたいな聲して出目ちゃん活辯が始まる。  
「味噌がすうなるぞ。」とふんちやんが冷笑  
してゐる「サフフ……」「ハハハ……」寄らば  
切るぞ」やり出すと思へば「雨が降る／＼雨  
が降るでない……と」なんてやる。その騒ぎ  
は半時間位續く「さあ消燈」ももつ一寸たの  
む」ホルガの船歌應援歌ひつきりなしの態だ  
安田君のキャンタンに球が當つた話が出て又  
大笑ひ。

隣りの室で何もかも聞いてゐるぞ若い者ち  
やなあと云ふ様な顔付に微笑して去られ  
た當時の面影を思ひ出して今更乍ら先生が懐  
しい。選手の氣質と技倆を以て適材適所に配  
置させられ、何一つとして申分なくあの楽し  
かつた「コンバ」の時や、あらゆる點、選手  
からは慈父の如く慕はれた名残惜しい先生は  
その後縣下の選抜大會に優勝戦で負けたその  
翌日本校を去られた。  
吾が部の内外共に改善された先生の偉大さ  
に今更敬服の外はない。

この様にして合宿生活の一日は終つてゆく十二時も過ぎれば大きいのも小さいのも皆小供の様になつて白河夜舟の艦を漕いでゐる。夏の合宿は學校があるし暑いしもう一段の猛烈さだ。又それに伴ふ悲哀憂鬱も多い。面白どころぢやない。面白くて愉快な合宿の裏には苦しい練習があり苦しい練習の影には華やかな勝利の光がさして来る。

苦しさに直するだけの勝利はどれだけ愉快であるか分らない。樂は苦の種苦は樂のたね」を如實に物語つてゐる。

面白い事はつきない。けれどこゝらで筆を止らう。

事實よりまづくなつた貧弱な文と共に球友諸君……筆者の暴言を許せ。

## 敗 戦 記

五年 宮崎 信義

Yさん!

今日は何かから云ふてよいか僕にはわかりま

の言葉が解りました!!

五年になるまではいかに口惜しく思つたつて左程でもありませんでした。五年にならなければほんこの敗戦の味は解りませぬよ。

誰とも一言話したくないあふれる涙をおさへてでもうるむ目を時々あげると観衆が氣の毒さうな顔をして歸途を見守つてゐてくれました。

「彦根えらかつたぞ」「元氣やつたぞ」「氣を落すな」「彦根!! 來年は又來いよ」「來年はきつと勝てよ!!」

思ひ出してゐる目がうるみます。あの時の光景が慰めが激勵が胸を斷つ様に響いてきます。

Yさん

僕は有難かつた!! 淋しかつた!! 肩のゆすれるのが自分ではどうにもなりませんでした。これ等心から慰めてくれる人達の前に土下座して感謝したい激情にかられました。こんな時にやさしく言はれると餘計涙が出てく

せぬ……。

さうく負けました!!…… 來る年も來る年も武運拙く敗戦の憂目をみせつけられました。僕等は善戦しました。そして遂に敗れました。又何を言はんと言はれるかも知れませぬ。でも今日は許して貰はねばなりません。A對B恨深くも我等が敵の軍門に降らねばならぬゲームセットが宣告されました。

「有難うございませぬ!!」帽子を脱いで微笑すらうかべつと挨拶しました……。だけど洪水の如くおしよせてくる熱い涙をどうする事が出来やう。やつと唇をかみしめて涙をおさへベンチへ歸つてきました。でも観衆の顔がうるんでほつきり見えませんでした。「彦根よかつたぞ」「來年は又來いよ」「ファンの人達が慰めてくれたり激勵してくれました。

此處がグラウンドでなかつたら、僕は大地にうつぶして思ひ切り泪のある限り泣いた事でせう。だけど此處がグラウンドであるさうぶ緊張によつて慰めてくれる人達に心の中でるのです。誰にでもいゝがかりついて思ひ切り泣きたい氣がしました。

でも「來年は又來いよ」「來年はきつと勝てよ」なんて激勵されると僕の心は又新しい涙で胸がつまつてしまひました。僕等五年の者には來年がないのです!! 來年のない僕等の心程淋しいものはありません。

未來のない寂寞にとらはれて知る人ぞ知る無量の感にうたれつとらへどころのない悲壯な淋しい感にうたれつと停留場へ重い足を運びました。敗戦の士ほごみじめなものはありません。電車の中でも人にかくれて思ひ切り泣きました。

たまらない寂寞がひしひしと身を締めつけるのです。

側に座はつてゐたK君に幾度血をばく思ひでただ一言「頑張つてくれよ!!」と言はらうとしたか知れませんでした。

だがどうしても出来ませんでした。この一語でも口からすべらしたらその後に来るもの

は拜みながら永久に自分からは去つてしまつた天津大會會場を見渡して綠ヶ丘よさような萬感交々致つて無量の感にうたれつと名残惜しくも退場しました。頭の中は濁流の如く現在より過去へ、過去より現在へ渦巻いてゐました。何と言つていゝかとても筆舌ではつくしがたいものでつまつてゐました。想像におまかせします。だけどこの心は五年になつて今の僕と同一境遇に立つた人でなければ解りませぬ。

たゞとゞめなく涙がこみ上げてきました。「これで終りだ!!」俺の野球生活も過ぎてしまつた!!「これが俺の最後だ!!」かう思つた時三年間勵んできた野球生活が餘りにも短くはかなく感じられました。一昨年敗戦しての歸途その時五年のT氏が肩をうつてはなをつまらして「オイ頑張つてくれよ!!」これだけ言はれました。

それを今自分がくり返へさなければならぬ時が來たとは!! その時になつて初めて自分が自分にもはつきりわかつてゐたからでした。でもこれだけでも言はないさたよりな様な淋しい様な氣で仕方がないのです。電車を降りてから並んで歩いてゐたK君とY君にあふれる涙を、しゃくりを頑張つてくやくつとめ「オイK……しツクク……」もう後が出ないのです。泪です。胸がつまつてしゃくりが出て話さうと思ふと餘計話せないのです。「ケイやんナニ?」「ナ……?……」僕が足の歩をゆるめて息をこらしてゐるものだからやさしくたずねてくれるのです。「しつかり……がんバツツ……」……。「しつかりがんばつてくれよ」やつと言つて道に立つて泣きました。小さな子が變な顔をして僕を見守つてゐました。旅館の前の神社に勇ましく出發した時と同じくわがづきました。往きは男々しく武運を祈り壯途にのぼつたがものふの習とは云へ敷時間後にこのやるせない心もて同じ神前にぬかづかねばならなかつた僕等の胸中をお察し下さい。



つまらぬ長文句をならべてお許し下さい。  
 あなたの御激励にこたへる事の出来なかつた  
 のはかへすも残念です。  
 では御体を大切に休み中に是非おいで下さ  
 い。

在阪神縣人會主催  
 縣下選拔大會之記

第一回戦 對八幡商業戦  
 四月二十一日甲子園大球場に於て十二時二  
 十分西澤(球)木戸(壘)二氏審判の下に本  
 校先校にて試合は開始さる。  
 第一回(本校)西野遊仙近藤一佃吉田三佃に  
 凡退す。  
 (八商)中村、原共に四球に出で徳永遊仙伊  
 東三佃に走者二三壘によりしも村上左飛に倒  
 る。(兩軍〇)  
 第二回(本校)西堀遊飛植田三振那須二飛に  
 振ばす。  
 (八商)若原投仙太田三振伊藤中前安打に出

で猪田左前安打失に二盗を企てり刺さる。  
 (兩軍〇)  
 第三回(本校)宮崎三振後松居遊仙一失に一  
 舉二進し一居の左前安打を遊撃手取つて三壘  
 に松居を刺さんせしも三壘失に松居生還す  
 一居三進後西野投前バンド効を奏せず一居本  
 壘に刺され近藤右佃に代る、本校一點を先取  
 して幸先よし。  
 (八商)中村投飛原三振徳永三佃。(本校一  
 八商〇)  
 第四回(本校)吉田三振後西堀第一球目を左  
 翼手の左を抜く大本壘打を受飛し堂々生還一  
 點を加ふ續く植田又もや左翼線上に二壘打せ  
 しも那須遊仙宮崎捕邪飛に後援なし。  
 (八商)伊東投仙村上左飛後若原四球に出で  
 しも太田三振に空し。(本校一八商〇)  
 第五回(本校)松居一居共に三振西野投仙  
 (八商)伊藤三飛猪田遊飛中村遊仙(兩軍〇)  
 第六回(本校)近藤右前安打に出で吉田投前  
 バンド投手二壘に暴投し近藤長驅生還す西堀

を擧ぐ。次打者近藤も右前安打に出で植田左  
 飛後西堀左前安打で走者一二壘により尙有望  
 に見えしも那須遊飛吉田投飛  
 (滋師)矢部三直中川投仙佐村三飛(本校一  
 滋師〇)  
 第二回(本校)宮崎遊仙一失に生き松居四球  
 一居の投前バンドに送られ西野捕前バンド一  
 失に一舉二進する間に宮崎、松居生還近藤四  
 球に出で植田左前安打に西野還りしも西堀中  
 飛那須二佃に植田二壘に封殺されて代る。  
 (滋師)森田遊仙、三宅三佃、中野三振(本  
 校三、滋師〇)  
 第三回(本校)吉田投仙、宮崎投飛、松居四  
 球に出でしも一居三振。  
 (滋師)馬杉遊仙後井上中前安打に出でしも  
 桐畑右飛に重殺さる。(兩軍〇)  
 第四回(本校)西野三振後近藤四球に出で植  
 田投飛西堀三佃失に生きしも那須左飛  
 (滋師)矢部投仙中川二佃失に生き佐村遊仙  
 内野安打となり兩者生き森田中前安打に中川

の遊仙に吉田二壘に封殺されしも西堀二盗成  
 り植田三佃後那須左前安打に西堀生還宮崎中  
 前安打して出でしも次打者松居三佃に那須三  
 壘に封殺されて漸く代る。  
 (八商)原徳永共にもろくも三振伊東中飛  
 (本校二八商〇)  
 第七回(本校)一居三振後西野遊仙失に出で  
 しも近藤遊仙吉田三振に凡退す。  
 (八商)最後の攻撃に入り村上遊仙に倒れて  
 後若原四球を選び出で太田遊仙失に若原三  
 進し太田二盗後若原本盗成り伊藤の左前安打  
 に太田生還し猪田一佃中村遊仙に終り二點を  
 回復せしも及ばず始終火を吐く如き接戦の結  
 果四對二を以て勝利は我が軍に擧り元氣満ち  
 大鐵傘をもゆるがさんばかりの拍手に送られ  
 て退場する時正に一時五十分なり。  
 (先攻)野藤田堀田須崎居居  
 (先守)西近吉西植那宮松一  
 本校二捕遊右投一三三中

還り：宅三飛落球に佐村生還森田三盗後中野  
 遊飛馬杉四球に生で井上二佃失に森田も還り  
 桐畑投仙野還に生き三宅還り打者一順し矢部  
 遊直に代りしも四點を返され同點となる。(本  
 校〇、滋師四)  
 第五回(本校)吉田遊飛後宮崎中堅越の二壘  
 打を放ち捕逸に三進せしも松居左飛、一居中  
 飛に後援なし。  
 (滋師)中川三佃失に出で佐村の中前安打に  
 進み森田投飛失に中川三壘に封殺され三宅遊  
 飛後中野中越三壘打を受飛し佐村、森田生還  
 二點をリードさる。馬杉二佃(本校〇、滋師  
 二)  
 第六回(本校)西野二佃失に出で近藤三振後  
 植田三佃失に生き西堀中前安打に西野還り那  
 須中飛に植田生還し吉田三佃  
 (滋師)井上四球に出で桐畑の投前バンドに  
 送られ矢部三飛失に生き中川、佐村、森田共  
 に四球に出で井上、矢部生還し三宅右飛の際  
 中川本盗せんとして刺さる。(兩軍二)

30	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0	1	1	1	0	2	4
2	4	6	7	0	1	1	1	0	2
3	4	6	7	0	1	1	1	0	2
4	6	7	0						



續く上池惜しくも捕邪飛に倒れ松居遊野選に西堀生還一居投側バンド一失に生き那須生還後西野左飛近藤投飛せしも吾が軍三點を先取し幸先よし。

(八商) 伊東四球を得原の二匍に二壘に封殺され若原一飛伊藤三振に空し。(本校二、八商〇)

第三回(本校) 宮崎二匍後西堀〇一の後左越大三壘打を憂飛し那須の投側バンド失に西堀生還吉田左前安打上池死球に一死満壘の好機再び来る。松居三側バンド失に那須還り一居の投前バンド内野安打となり吉田還り投手暴投に上池も生還西野又投前バンドし捕失に松居還り西野二盗後近藤投側失に生き一居生還す。打者一順して宮崎三飛後西野三盗を企て倒る此の回本校六點を加へ大勢決す。

(八商) 米澤四球猪田中前安打に出で少しく有軍に見えしも中村遊匍に猪田二壘に封殺され太田左飛徳永三匍に八商軍振はず。(本校六八商〇)

第二回(八中) 小菅投飛山田兄四球に出で藤井中前安打し西澤投匍野手選擇に一死満壘となりしも次打者安村三匍に山田兄本壘に封殺され川村投飛に吾が軍危機を脱す。

(本校) 西堀三振那須一邪飛後吉田遊匍一失に一舉二壘を占め續く松居二一の後中堅越の大三壘打を憂飛し吉田生還上池三匍内野安打に松居も還り上池二盗後一居右越二壘打に上池生還し計三點を數ふ西野三振に漸く代る(八中〇、本校三)

第三回(八中) 山田弟中堅横を抜く二壘打を放ち高瀬三匍一失に生き直ちに二盗藤野投匍後高瀬離壘して二三壘間に狭撃され死す小菅三振。

(本校) 近藤三振宮崎二匍西堀遊匍(兩軍〇) 第四回(八中) 山田兄左飛藤井投匍西澤三匍(本校) 那須三振吉田右翼横を抜く二壘打を放ちしも松居投匍上池投直に代り投手戦始り試合白熱す。(兩軍〇)

第五回(八中) 安村三振川村中飛山田弟死球

第四回(本校) (八商若原中堅に退き徳永アレ一トに立つ) 西堀、那須、吉田相續いて四球に出で(本校植田上池に代る) 植田中飛機打に西堀生還那須三盗松居四球一居の中前安打に那須、吉田生還し西野三振近藤二飛に漸く代りしも又三點を増す。

(八商) 伊東中前安打に出で原の投匍に送られて後三盗若原投匍一悪投に伊東還り伊藤三匍米澤三振せしも一點を回復す。(本校三、八商一)

第五回(本校) 宮崎三振西堀遊匍那須二匍に凡退す。(八商) 猪田投匍中村四球に出で太田の遊匍に二壘に封殺されんとしたが二壘手逸して兩者生き徳永遊匍に太田二壘に封殺後徳永二盗したが伊東投匍に中村本壘を襲つて刺され十一對一の五回コールドゲームを以て勝利は吾が軍に歸する。時正に四時四十分

に出でしも投手牽制球に刺さる。(本校) 一居三遊間安打に出で西野の投側バンドに送られ近藤の中前安打に一居長驅生還し一點を加ふ、宮崎四球を選んで出で西堀二匍一失に近藤その隙をぬらつて本壘を襲ひしも残念す前に於て憤死す、那須左飛。(八中〇、本校一)

第六回(八中) 本校那須遊撃に西堀投手に代る) 高瀬中前安打に出で藤野左翼二壘打に續く小菅又左前安打に高瀬還り藤野三盗せんとして刺さる山田兄又三遊間安打に藤井投匍失に小菅生還西澤一飛安村遊飛に止み二點を回復し試合益々緊張す。

(本校) 吉田右前安打に出で松居四球(本校木下上池に代る) 木下捕邪飛後一居三匍内野安打に一死満壘の好機来る、西野二飛に倒れしも近藤其く選びて四球を得押出されて吉田還る宮崎遊匍に一居三壘に封殺さる。(八中二、本校一)

第七回(八中) 川村遊匍山田弟高瀬もろくも

本校(先攻)	野藤崎堀須田池(植田)居居	27	11	10	2	5	1	2	1	2	0	2	6	3	0	11
左二一遊投捕右三中	西近宮西那吉上(植松)	19	11	10	2	5	1	2	1	2	0	2	6	3	0	11
1得點	3安打	2死	3三振	4打	3壘打	3盗	0機	0打	8失策	0	2	6	3	0	11	
19打數	11得點	10安打	2死	5三振	1打	2壘打	3盗	0機	0打	8失策	0	2	6	3	0	11

縣下リーグ戦之記

第三回戦 對八日市中學戦  
六月二日本校々庭に於て二時三十分小林(球)池内(壘)二氏審判の下に八中先攻にて開始す。  
第一回(八中) 山田弟投匍高瀬一匍藤野捕邪飛に凡退す。  
(本校) 西野三振近藤投匍宮崎死球に出でしも二盗を企て刺さる。(兩軍〇)

三振す。

(本校) 西堀右飛那須三匍吉田遊匍に共に入らず。(兩軍〇)  
第八回(八中) 藤野中飛失に一舉二壘を占め小菅二匍に走者三壘にある時捕手吉田負傷し退き西野捕手に木下二壘に近藤遊撃に那須左翼に布施右翼に入る、山田兄三飛藤井投匍。(本校) 松居遊匍内野安打に出で二盗後木下投前バンドに送られたが一居遊飛西野右飛に空し。(兩軍〇)

第九回(八中) 西澤左飛安村三振後川村遊匍失に三壘を占めしも山田弟一飛に空しく五A對この善戦の後吾が軍に凱歌擧る。時に五時五分

本校	野藤崎堀須田池(植田)居居	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
左二一遊投捕右三中	西近宮西那吉上(植松)	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
35打數	31得點	9安打	5死	4三振	2打	1壘打	3盗	0機	0打	5失策	0	0	0	0	0	0
2得點	7安打	5死	4三振	2打	1壘打	3盗	0機	0打	5失策	0	0	0	0	0	0	0
35打數	27得點	10安打	2死	5三振	1打	2壘打	3盗	0機	0打	8失策	0	2	6	3	0	11

攻)弟瀬野管兄井澤村村  
 (先)山高藤小山藤西安川  
 中)二三遊投右左一捕  
 三壘打 松居  
 二壘打 一居、吉田、山田弟、藤野  
 試合時間 二時間三十五分

彦根高商主催

近府縣野球大會之記

第一回戦 對大谷中學戦

六月八日高商球場に於て三時五分釜江(球)

雨森(壘)二氏審判の下に本校先攻にて開始

第一回(本校)西野近藤三振後宮崎三兪失に出でしも西堀二壘。

(谷中)木村三兪失に出で信羅四球村川死球齋藤豊津相續いて四球後澤田左越三壘打に走者一掃し一舉五點を奪はれ松本三振後桑原又左中間二壘打に澤田澄清水四球木村三振信羅二兪失桑原還り村川遊兪失に清水も還り齋藤四球後豊津三遊間安打に信羅村川相ついで生還計十點を納める澤田三振に漸く代る。(本

試合時間 一時間五十分

縣下リーグ優勝戦之記

六月十六日縣下リーグ戦の湖南の勝者水口中學と縣下に於ける最後の覇を争ふ事となり先づ第一回戦を同校々庭に於て二時四十分本校先攻にて開始さる。

第一回(本校)一居遊飛に倒れ近藤四球を選びて出で那須又遊飛後近藤二盜續く西堀右中間に二壘打して近藤還り先づ一點を先取す、吉田捕邪飛に退く。

(水中)中西遊備川村三振東投兪に難なく片付く。(本校一、水中○)

第二回(本校)宮崎捕手のインターフェヤーに出でしも松居投兪上池二飛西野三振に空し(水中)岡三壘上を抜く安打を左翼手逸して三壘打さなし川島三振後増山四球に出で二盜後福永中前安打に岡、増山還り金澤又中前安打に福永二壘封殺し金澤牽制球に刺されしも二點を奪はれ形勢逆轉す。(本校○、水中二)

校○、谷中一○)

第二回(本校)植田三遊間安打に出でしも松居投兪に植田封殺され松居二盜せしも那須三振木村三兪に桑原三壘に封殺され信羅三振。

(谷中)松本投兪桑原中前安打に出で清水四球木村三兪に桑原三壘に封殺され信羅三振。

(兩軍○)

第三回(本校)西野三振後近藤右前安打に出で宮崎遊兪に封殺され宮崎二盜せしも西堀三直に無爲。

(谷中)村川遊備齋藤三兪豊津左飛(兩軍○)

第四回(本校)植田、松居共に一飛那須投兪

(谷中)澤田左飛松本三兪失に出で二盜桑原一飛清水三兪一失に出でしも木村三兪。(兩軍○)

第五回(本校)本校川那邊、木下に代る)川

那邊死球を喰つて出で二盜後一居の投前ベン

下に三進し西野三振捕失に川那邊生還し漸く一點を報ゆ近藤遊兪。

(谷中)信羅左飛村川三兪齋藤左飛失に出で

第三回(本校)一居二飛近藤那須共に三振。

(水中)隱岐三振後中西四球に出で川村三兪内野安打となり中西三盜後東遊兪失に中西生

還岡三遊間安打に川村還り東三盜せんとして二三壘間に狭撃され川島二兪に止みしも又二

點を加ふ。(本校○、水中二)

第四回(本校)西堀二飛後吉田左中間安打に

出で二盜せしも宮崎左飛松居一兪に振はず。

(水中)増山右前安打福永遊飛金澤遊兪に増

山二壘に封殺され隱岐四球に出で中西中堅に

大飛球を打ちあげ之を失せしめ金澤還る中西

投手牽制球に刺さる。(本校○、水中一)

第五回(本校)上池四球に出でしも西野三振

一居左飛近藤一兪。

(水中)川村三飛失に出でしも東の二兪に二

壘に封殺され岡三兪失に出でし時續く川島右

中間を抜く二壘打に東還り増山又三兪失に岡

生還福永死球を喰ひ一死滿壘となり續く金澤

三振才岐中前安打に川島生還増山も續いて本

壘を突かんとして刺さる。(本校○、水中三)

二三盜せしも次打者豊津三振(本校一、谷中○  
 第六回(本校)宮崎三振後西堀四球に出で二  
 盜植田中飛松居遊兪失に西堀還り松居二盜せ  
 しも那須投兪。

(谷中)澤田死球に出で松本中前安打に三進  
 し二盜後桑原の投兪に澤田還り松本も本盜せ  
 んとして刺さる清水三振。(兩軍一)

(本校)川那邊三振一居右飛西野一兪に倒れ  
 奮戦の利あらず十一A對二にて戦は涙と共に  
 終る。時に四時五十五分

野	藤	崎	堀	田	居	須	下	居	2	IIA
西	近	宮	西	植	松	那	木	川	1	IA
捕	二	一	遊	左	三	投	右	中	0	0
23	2	2	7	3	0	0	4	1	6	
28	11	5	6	8	1	1	2	0	3	
打	得	安	三	四	打	三	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
打	得	安	三	四	打	打	打	打	0	0
11	5	6	8	1	1	2	0	3	10	0
數	點	打	振	死	打	打	打	打	0	0
11	5	6								